☆日米前段階武装蜂起から
攻勢的世界革命戦争を切り開け！
☆世界党—世界赤軍—世界革命戦線を創出せよ！
☆国際根拠地—国際地下活動を組織し
蜂起の軍隊を建設せよ！

赤軍

8月5日
5号
一部 30円
購読料10回500円(〒共)

共産主義者同盟赤軍派
日本委員会宣伝局
〈連絡先〉
東京都文京区本郷1～29～13
開拓社
TEL 03—813—1864
〔関西〕 075—231—0431

二日米前段階蜂起貫徹二

全世界的蜂起態勢を構築せよ！

ハイ・ジャック作戦の成功を踏まえ
先進国を世界革命戦争（攻勢）の主戦場とせよ！

共産主義者同盟赤軍派日本委員会

革命的同志諸君、革命戦士諸君、革命戦線の同志諸君、全世界、全日本のプロレタリア、人民諸君！

我々赤軍派の路線の第一は、今秋、日、米、西独等先進国同時前段蜂起の貫徹を通しての単一の攻勢的世界革命戦争の永続的実現であり、第二は、かかる革命戦争の永続的展開の中で世界党—世界赤軍—世界革命戦線を創出することである。そして、このことを貫く核心的問題、我々の核心的問題は、軍事・革命戦争の唯一世界的永続性であり、かつこれを基礎とする世界的永続的な党形成—階級形成である。そして、今や、この二つに集約される政治的・軍事的・組織的な我々の総路線戦略は、かかる核心軸を踏まえつつ、より実体性をもつ戦術として提起され、意志統一されなくてはならない。

戦略上の核心軸と実体的戦術

(A) 国際階級闘争の現局面と我々の到達段階

核心軸を踏まえつつも、我々が総路線戦略をより実体的、具体的、実践的な戦術へと高めていかなくてはならない、事態が進行している。この事態の第一は現代帝国主義過渡期世界に於ける世界階級危機が「体制」間戦争の成熟しつつあることであり、第二は、軍事・革命戦争の世界的永続性とこれを基礎とする反戦闘争の再度の高揚場とする革命戦争の中で党形成階級形成の世界的永続性をめざす我々の闘いの第一歩—ハイ・ジャック作戦（よど号）の成功的貫徹である。体制間戦争への世界階級危機の成熟とは言うまでもなく中国を革命根拠地国家とし、北ベトナム、北朝鮮帝国主義を中軸とする、日米安保—アジア反革命を前線拠点とするベトナム革命戦争のインドシナ同盟を媒介としての、朝鮮、インドシナ侵略・反革命戦争、対中国侵略、反革命戦争、世界的な侵略、反革命戦争への動向である。そして、我々のハイ・ジャック作戦は、実現すべき、実体的環、戦術を意志統一しなくてはならないのである。

(B) 攻勢段階を切り抜ける二つの軍事組織戦術

前段階蜂起単一の攻勢的世界革命戦争の戦略的展望を実現すべき環、戦術は、①先進国に於ける連続的武装蜂起、②労働者国家左派、中国のこれへの引き込み、参戦の二つである。

即ち、六〇年代世界階級闘争、防御的世界革命戦争の軍事的永続性の展望を確立し、この下で六〇年代後半に於ける、防御的世界革命戦争の最高到達点に於ける、仏五月革命、日、米安保決戦に於ける、自然発生的権力闘争の成熟点に於ける帝国主義への軍事的敗北を通して、軍事の一国的な非永続性故に、革命戦争から、権力闘争—武装蜂起からの召還を開始し、再度、軍事革命戦争へ、権力闘争—武装蜂起へ結集し、蜂起の軍隊を建設し、これを基礎に、連続的武装蜂起として、先進国に於ける革命戦争を開始し、これを世界革命戦争の主戦場としなくてはならない。この先進国革命戦争—連続的武装蜂起—労働者国家左派後進国革命戦争への、安保、NATO—国際反革命同盟を媒介としての帝国主義の国際的密集陣型を粉砕し、革命戦争—武装蜂起からの召還を開始し、再度、軍事革命戦争へ、権力闘争—武装蜂起へ結集し、蜂起の軍隊を建設し、これを基礎に、連続的武装蜂起として、先進国に於ける革命戦争を開始し、これを世界革命戦争の主戦場としなくてはならない。

そして、かかる先進国の連続的、同時的武装蜂起が、当初は、単一の世界革命戦争を切り開くべき前段階蜂起として存在しつつも、世界革命戦争の防御から対峙への発展等質的なプロレタリアーとして存在しつつも、その同時性、連続性、永続性を基礎としつつ、遂に、労働者国家左派、後進国革命戦争派を引き込み、参戦させ、先進国を主戦場とする単一の攻勢的世界革命戦争を実現する戦略的展望を要求していることを確認しなくてはならない。

この過渡期世界現代帝国主義の世界階級危機と形成されつつある米、日、帝国主義を中軸とする、日米安保—アジア反革命同盟を媒介としての、朝鮮、インドシナ侵略・反革命戦争、対中国侵略、反革命戦争へ向かう帝国主義との、前段階蜂起をもってする先進国を主戦場とする革命戦争の中で実践せんとする画期的闘争として存在した。

我々は、かかる客観的主体的な新たな情勢、新たな到達段階を踏まえ、永続性と世界的、永続的な党形成—階級形成を核心軸としつつ、今秋、日米西独等先進国同時前段階蜂起—単一の攻勢的世界革命戦争、プロレタリアートの国際的武装の統合—世界党—世界赤軍—世界革命戦線という我々の総路線、戦略的展望を、実現すべき、実体的環、戦術を意志統一しなくてはならないのである。

攻勢段階を切り抜ける二つの軍事組織戦術

前段階蜂起単一の攻勢的世界革命戦争の戦略的展望を実現すべき環、戦術は、①先進国に於ける連続的武装蜂起、②労働者国家左派、中国のこれへの引き込み、参戦の二つである。

即ち、六〇年代世界階級闘争、防御的世界革命戦争の軍事的永続性と世界的、永続的な戦争の中で、全人民的分派闘争階級闘争を通じて自己を世界革命の根拠地国家へと転化しつつある左派労働者国家群、中国、北ベトナム、北朝鮮、キューバ、アルバニア等、あるいは、これに支えられて、帝国主義との永続的、軍事的根拠地にあるのではなく、この先進国革命戦争の中に引き込み、参戦させ、先進国を主戦場とする世界革命戦争を実現する戦術としつつも、世界革命戦争の防御から対峙への発展等質的なプロレタリアーとして存在しつつ、その中に於ける、先進国ブロックに於ける世界的な高揚の開始を一方の極、他方の極に存在する、この七〇年代初頭の高揚によって引き出される、日米安保—アジア反革命戦線を、軍事・革命戦争の世界的永続性と世界的、永続的な党形成を核心軸としつつ、今秋、日米西独等先進国同時前段階蜂起—単一の攻勢的世界革命戦争、プロレタリアートの国際的武装の統合—世界党—世界赤軍—世界革命戦線という我々の総路線、戦略的展望を、実現すべき、実体的環、戦術を意志統一しなくてはならないのである。

戦略上の核心軸と実体的戦術

(A) 国際階級闘争の現局面と我々の到達段階

核心軸を踏まえつつも、我々が総路線戦略をより実体的、具体的、実践的な戦術へと高めていかなくてはならない、事態が進行している。この事態の第一は現代帝国主義過渡期世界に於ける世界階級危機が「体制」間戦争の成熟しつつあることであり、第二は、軍事・革命戦争の世界的永続性とこれを基礎とする反戦闘争の再度の高揚場とする革命戦争の中で党形成階級形成の世界的永続性をめざす我々の闘いの第一歩—ハイ・ジャック作戦（よど号）の成功的貫徹である。体制間戦争への世界階級危機の成熟とは言うまでもなく中国を革命根拠地国家とし、北ベトナム、北朝鮮帝国主義を中軸とする、日米安保—アジア反革命同盟を媒介としての、朝鮮、インドシナ侵略・反革命戦争、対中国侵略、反革命戦争へ向かう帝国主義との、前段階蜂起をもってする先進国を主戦場とする革命戦争の中で実践せんとする画期的闘争として存在した。

我々は、かかる客観的主体的な新たな情勢、新たな到達段階を踏まえ、永続性と世界的、永続的な党形成—階級形成を核心軸としつつ、今秋、日米西独等先進国同時前段階蜂起—単一の攻勢的世界革命戦争、プロレタリアートの国際的武装の統合—世界党—世界赤軍—世界革命戦線という我々の総路線、戦略的展望を、実現すべき、実体的環、戦術を意志統一しなくてはならないのである。

攻勢段階を切り抜ける二つの軍事組織戦術

前段階蜂起単一の攻勢的世界革命戦争の戦略的展望を実現すべき環、戦術は、①先進国に於ける連続的武装蜂起、②労働者国家左派、中国のこれへの引き込み、参戦の二つである。

即ち、六〇年代世界階級闘争、防御的世界革命戦争の軍事的永続性と世界的、永続的な戦争の中で、全人民的分派闘争階級闘争を通じて自己を世界革命の根拠地国家へと転化しつつある左派労働者国家群、中国、北ベトナム、北朝鮮、キューバ、アルバニア等、あるいは、これに支えられて、帝国主義との永続的、軍事的根拠地にあるのではなく、この先進国革命戦争の中に引き込み、参戦させ、先進国を主戦場とする世界革命戦争を実現する戦術としつつも、世界革命戦争の防御から対峙への発展等質的なプロレタリアーとして存在しつつ、その中に於ける、先進国ブロックに於ける世界的な高揚の開始を一方の極、他方の極に存在する、この七〇年代初頭の高揚によって引き出される、日米安保—アジア反革命戦線を、軍事・革命戦争の世界的永続性と世界的、永続的な党

前段階蜂起統一戦線（R F）構築に向けて　》1《

6月安保闘争総括と諸党派批判

■日本革命戦線全国委員会■

武装権力闘争への大衆的成熟の解体化と既成左翼の変質を起え今秋、蜂起の戦線を打ち固めよ

「60年安保を超える大衆結集」と「社民にかわる新左翼の量的、質的拾頭」といわれた6月闘争は、既成諸党派の手ぼなしの讃美とは異質に、「ゲバ抜なし」の全面開花の中に次のことを示している。それは、第一に67年一〇／八以後69年秋までの闘いを展開した、武装権力闘争の大衆的成熟と、にもかかわらず昨秋の敗北以後の大衆の成熟解体化現象であり、そして第二に社民の解体と体制内化への一層の進展と共に既成新左翼諸派の変質、解体がそれである。この二つの点が6月闘争の総括を貫く基本点である。

6月闘争は、客観的には、一方でのインドシナ戦争の拡大に伴う政治危機の深化と、他方においては日本帝国主義のアジア侵略路線の進行の中で迎えた闘いであり、更に昨秋安保決戦の帰結が不可避に闘いの側と帝国主義ブルジョアジーとの主客の中に拡大されて表現される位置の闘いであった。

だが、インドシナ戦争の拡大と日本帝国主義のアジア侵略への進行という、復合化された政治的危機感の発生にもかかわらず、それは直接的な大衆の戦闘化へは結合しなかった。確かにその危機感の一般的反映が「多用な」量的結集と「新左翼」の動員の巨大さによって表現されたにしても、昨秋の敗北の深さとそれ故の既成新左翼諸党派の限界後退分解は、すでに現局面での対応能力を喪失していたのであるこの意味で、まさに6月闘争は、直接的には昨秋の敗北の最後的確認であり、世界革命戦の開始によって、世界の帝国主義心臓部での殲滅戦の開始によって、世界のプロレタリアート、人民が六〇年代の教訓を踏まえた帝国主義ブルジョアジーの新たな高次な動向」へ永続的に発展し得る新たな国結、組織形態、世界赤軍—世界革命戦線を実態化すること、これである。

ゲリラ戦を止揚し蜂起へ

六〇年代から、七〇年代への歴史的転換を、先進国プロレタリアートの「恒常的武装闘争」＝都市ゲリラ戦で開始しようとする諸君がいる、六〇年代革命派左派の変質の典型であるこれらの諸君は、帝国主義の侵略、反革命戦争の永続化に対して、全世界で武闘装争を巻き起こすことの「武装闘争」の一般の地理的な平板的な世界的な結合によって獲得されるのではない。一国プロ独の武装闘争を」「アジア革命の防御段階」に導かれ、戦術的後退を意味する闘いでしかない。

先進国を主戦場とせよ

世界革命戦争は、対峙—攻勢段階に於て、増々その主戦場を先進国主義国家内に移行させる。六〇年代後半の革命戦争は、その主戦場をアジア後進国武装プロレタリアート対ブジョアジーの武装闘争の開始の前進に止まらざるを得ない限界をもっているのである。我々は世界革命戦争の主要な戦場が先進国であるということを、予見や直観として提示しているのではない。第一に、前段階武装蜂起の貫徹その主戦場を先進国に移行させること、これである。